行方、化尼依観無量寿経誠説、開旨大曼陁羅幽旨、観夫曼荼羅庄厳奇麗厳餝也、貫珠定恵解之光、互輝申金似瑩紫摩黄金之色映日、南之縁一経発化之序分也、禁母之往蹤歴之如見、此縁者三昧正受旨帰也、善男女之観門、明々無暗、仰中台者即四十八願荘厳之浄土皓然于眼前、顧下方又上中品来迎花台、于心中森羅、是則弥陁知願之力遷他力於日域之雲、大聖定恵之徳、西土於南浮之堺、当知一塵法界本来無㝵、大小長短豈論定相、今希有而得見、誰不生難遭之想、何商(啻誤カ)暫被当機、而示現応相而已乎、即是遙期遐代而宜施利生、重作四句之偈頌、密示二重之往縁、往昔遂(迦カ)葉説法所、今来法基作仏事、卿懇西方、故我来、一入是場永離苦、当知此処即古仏経行之庭、霊仙窟宅之境也、朝野遠近懸持於曼陁(羅誤)荼者、老少尊早運歩於伽藍者、自除災与楽之達望、至浄土菩提之深益、機縁雖臨仰而不虚、于時本願禅尼、且正拝生身御応相、且委受化人之教訓、泣顧宿願純熟、伏喜仏陀之加被、嗚呼妄想障重本雖隔望、於安養之砌而見感深、今落涙於未曽有之境、従今日至成仏、軽命而専可守、鏤骨而豈敢忘、抑我善知識何所来乎、又彼織女誰人乎、化尼容々汝不知乎、我身是西方極楽世界之教主也、織女即我左脇弟子観音大井也、以本願力古来令安慰汝也、出離生死之期已得境、往生極楽之行茲可足、深知慈恩、可報仏徳、如此再三相語慇懃也、其深也、其後化尼指西方入駟雲畢、方今願主魂悦忽思悄然、禅容去無蹤、只寄思於西刹蓮台雲、慈訓留多残、湿袂於東垂蓬屋之暁露、唯願今生永離之愁、為浄土再会之縁、介降曼陁羅之名称広聞異邦、霊像之帰依普及諸憂、況乎禅尼瞻仰之窓前秋月已老、観想之床上春風幾廻、送十余年彼光任天、光仁天皇御宇(時ヒ)宝亀六年乙卯暮春三月之天中旬第四朝、如宿願遂往生畢、時青天高晴紫雲斜聳、音楽西聞聖衆東来、端坐頭低寂然気絶、面色特鮮形容如咲、凡厥平生霊徳臨終之奇瑞、連綿不遑羅縷而已、

建長五年壬丑(ママ)四月廿五日北京於四条之坊門西洞院書写[ ]

表書云

当麻寺縁起本付私云以此本大曼陁羅堂為修理之勧進帳ト沙門[ ]

三　明通寺縁起　一帖

紙本墨書　折本装　南北朝時代（応安七年）写本

縦 29.0cm　横 11.8cm　紙数4枚（14折）（御経蔵第九三箱の中）

明通寺は福井県小浜市にあり、古来若狭国第一の名刹として最も由緒のある寺である。本縁起の成立は奥書にもある如く文永七年十一月であるが、本書の書写は応安七年四月二十五日で、筆写は栄祐である。栄祐なる人物については詳でないが、多分明通寺の僧であろう。本書の書写は前述の如く応安七年で、明通寺縁起としては最も古い写本の一つということが出来よう。従って参考までに本書の全文をここに紹介することにした。なお巻首には「仁和寺」の墨書と「仁和寺」の額形朱印がある。句読点は原本には見られないが、便宜上筆者が加えたものである。

（表紙表題）

「明通寺縁起」

坂大将軍鎮守府大納言 坂上田村丸本記事、

右明通寺者、若狭国遠敷郡松永庄之内在之、国中無雙之甲岷、三郡
超過之霊場也、本仏者十二大願聖容衆病悉除之本誓無誤、脇士者二
六神将之忿形悪魔降伏之悲願有恃、故自東自西仰崇帰依之人、継踵
而勢々、于朝于暮、恭敬合掌之輩交袖而連々、然問(間カ)其往昔尋彼創者、
右近衛大将坂上卿建立伽藍也、所由者、自柏原天皇参(忝)賜当国之国司、
令知行之間、葛井親王之女春子女御、奉為産生平安之祈禱、誓勝地
欲興(隆誤カ)際伽藍時、国中仁可然処相尋矣、遊行之砌、松永之庄内有一深
山号寺谷、山峯聳紫雲日々不異霊山崛宅之堺、曜光明夜々殆諍浄瑠
璃之界赫奕、誠仁将軍成恠、行有彼所、効験掲焉之辺、利益殊勝之
栖也、田村丸心中悦喜無極矣、故示此地定伊王霊場、遂以大同五年庚刀
八月八日、建精舎崇尊像料木以椈木作故号彼寺椈山寺也、最初建立之次第大概如斯矣、

一本檀那田邑麻呂大納言事　人以生

坂上田邑麻呂大納言者、自前漢高祖皇帝卅八代、自彼漢(後誤カ)光武皇帝十
九代、自彼漢(後誤カ)孝霊皇帝十三代、自彼漢(後誤カ)阿智本朝応神天王廿一年率一県同姓人数百人出漢朝之家入
日本国即有勅語大和国檜前地居之一名莫智王也　十一代之孫、贈大納言勲二等苅田九(丸誤カ)二男也
委見檜前本系所記、大高祖皇帝提三尺劔有天下、光武皇帝代劉玄更始有国
并見漢印之儀矣、介来代々(衍カ)代四海之鯨鯢、九土之風塵者、是非他氏、
偏在此家而已矣、宝亀十一年近衛将監補、延广(ママ)十四年任征夷将軍正
四位下近衛中将越後守、同年二月兼木工頭、同年十一月叙従三位、
同廿二季二月任形(ママ)部卿、同廿三季正補陸奥出羽按察使、同廿四季任
参議、弘仁元季叙正三位任中納言、同季九月任大納言先々兼近衛大将如願、
弘仁二季五月廿三日丙辰奄而薨、于時御季五十四歳、身長五尺八寸、
胸厚一尺二寸云々　委事清水寺縁起大和国檜前本記在之

一最初建立之後、経一百卅七歳之皇(別筆)「星」霜、不図堂舎焼失草(畢カ)、於斯止住
久脩禅門、抛三衣一鉢、仰天伏地、無極悲歎之処仁、遙避一里在深
山、自彼山之中、放金色之光明而照、焼失之本堂之跡、僧侶成不思
議之念、相尋光明於行見、在大般石、彼石之上尊像立御坐彼石則今護法天等
岩、于時国司(別筆)「改」政、椈寺号明通寺、実未曽有之霊仏、不可量之尊像也、
也
更不可勝計者也、嗚呼昔生身如来者、黄金之色身空交。栴檀之煙、今木
像尊像者恭白檀之膚、飛免炎上之難矣、故誰人不致帰依、何輩不傾
頭哉、其後一人聖人出来、本堂造立近江国人来迎坊云々、老(ママ)身狐独而可然無
知識、故才木雖貯山林、更無人夫之便、偏此事悲歎之処、大雨頻降、
洪水殆漲之間、本堂之辺憐才木、皆共流留、成聖人悦(悦)喜、国中人民
等見奇特端(瑞カ)相、季世遂建立造功畢、建立以後聖。身指西方去々云、次
一百廿歳之後、焼亡之難在之、先様本仏更飛不焼事重委不注之、次以建久
季中之比、復炎上之難出来、本尊焼有披露之処、炭燼之中見者、三
十二妙相当煙如殆赤栴檀之尊像、在世難有末代不思議也、見人莫不
成奇特之思、聞者莫不流随喜之涙、爰以長谷清水之観音、不免一度
火災之難、当国明通寺薬師不遇三度焼失之難、是実生身之如来法身
之仏也、雖四百七十五季之星霜、旧慈悲猶末代新人中天上殊勝之霊
仏、過現当来無雙本尊也矣亦聖人出来播州人也本山僧式部公云々観西也、彼弟肥前公厳
西云々、皆共尊像行久修練行人也、彼厳西在弟子但馬房何念云々、藍僧藍僧有之
梟悪之身、院主職相続云於斯地頭方不叙用之、然間本仏夜中偸出同
国三方郷月輪寺本堂奉秘之、即時露顕、彼僧難逃自過、終関東六波

羅殿御計、以延応元季己宛(亥)春比西国遠流畢 此時自柏原天王院宣并縁起、仏具経論聖教皆彼僧焼失之、暫
此間当寺僧侶不住也、可然行者相尋砌、阿闍梨勝賢摂州人也以事便止住
当寺房舎、興隆禅門、相語崇仏法写経論偁、天長地久御願円満奉祈、
宝治元年丁未春鎮守権現御殿造建、同二季大鳥居蕐屋建立、人命不定
也、不図建長五季正月廿六日死去歳六十七歳、彼勝賢阿闍梨弟子四十余
人之中、以阿闍梨頼禅、当寺付属畢、然間頼禅付属以後、所起之堂
舎目録次第事、
一本堂一宇 三間四面一丈二尺間、檜皮葺、用途一千余石、人夫一万二千人也、正嘉二季歳次丁巳四月十日棟上畢
一二王堂一字 二階楼門檜皮葺 文永元年甲子四月廿六日建立
一本堂供養 請僧一百口童舞在之 文永二季九月五日
一二王堂供養 請僧一百口 文永三季正月廿六日
一洪鐘一口 用途八十余貫文 文永四季三月三日
一三重宝塔一基 尺迦像并普賢像各一体奉安置之、文永七年十月十三日棟上畢

抑以前所修造堂造仏之廻向偁、奉為金輪聖主天長地久御願円満也、
兼国吏天下、安穏泰平、諸人快楽、当寺繁昌、法界無差故也
文永七年十一月日 注之
正応五年壬辰六月十八日院主権律師頼禅往生摂州溝杭所生〻年八十二
歳
干時応安七年甲刀卯月廿五若州明通寺後谷日光坊書写畢
雖為如鳥跡興隆仏法故也 栄祐

四 和州橘寺勧進帳 一巻

紙本墨書、巻子本、紙背消息 鎌倉時代(弘安六年)写本
縦 24.0cm (塔中蔵第四箱の中)

弘安元年(1278)橘寺修造の際の勧進帳の写本である。本文末尾の日附からも明な如く弘安元年九月に作られたもので、奥書によればこの作者は定円であるという。勧進の趣意を述べるに当つて、橘寺の縁起を記しており、この点において史料的価値が高い。本書によれば建長年間に覚空上人が当寺の修造を行つたが、半ばにして挫折した。そこで弘安元年に至つて再び当寺住侶の間から営作の企が起り、勧進を行うことになつた。この時修造を計画されたのは食堂、浴室、経蔵、鐘楼、僧房等であつたようである。この勧進によつて、当寺の修理がどこまで果されたかは明でないが、鎌倉時代中期の当寺の事情を知る上で重要である。特に当時の史料は現存するものが極めて乏しく、寺史を知る上で貴重な史料といつて差支えなかろう。しかも本書の書写は成立後約三ケ月しか経過していない弘安元年十二月十日で、原本が知られていない現在、作製と殆ど同時期に写された本書の存在は珍重すべきものである。なお原文には振仮名、送仮名、返点が記されているが、これはすべて省略した。句読点は筆者において加えたものである。巻首に「心蓮院」、巻末に「仁和寺、心蓮院」の長方朱印があり、表紙、軸は共に後世の修補にかかるものである。

（表紙表題）

「和州橘寺勧進帳定円法印筆」

請蒙十方助成令遂一寺修造状

副

仏閣僧坊法会等目録

右八万四千歳之寿域焉、成目五歳濁乱之慈願、九万三千人之得道矣、莫非一人勧化之勝縁、我願既同劫簸極滅之善巧、衆望焘慣頻婆広大之嘉蹤者乎、伏惟当寺者、

推古天皇治馬台之古、救世菩薩在竜楼之世、綷起　叙念、肇拓洪基、清涼中殿之変花界也、自伝三台宮之風、逸多大土之耀月輪也、未隔六欲天之雲、勝鬘開演之夜、天感降蓮華之瑞、精舎建立之後、俗呼留橘樹之名、本称菩提寺、便是　三菩提証得之霊場也、古号仏頭山、寧非千仏頭出現之勝地哉、加以斑鳩太子、種々之亀鏡多納置於斯処、蒼鷹指南片々之鴛瓦、遂掘出於近郭、礼之則大権之昔化不遠、得之亦中興之時至無疑、何唯供僧伽褁衣於那渇国中、甘雨消一天之災、理仏説利亟於王舎城外、香燈留百年之光而已哉、凡太子於此示誕応、太子於此転法輪、太子於此斂鬢髪、太子於此安霊像（御自作観音地蔵、二菩薩等也）　奇異独秀于四十六箇之伽藍、利益猶盛于六百余廻之暦草、然而雲楯霞軒之構、星霜積兮或有無蘿襟薜衲之栖、荆棘塞兮時来往、々々之客皆掩涙、止往之侶那堪悲、彼嘉禎有本願聖主之霊託、雖仰鑒計於向後、建長有覚空上人之精誠、雖励営作於其時、莫大之企　一半未成、爰住侶等相議曰、不考不鳴、金石之類取喩、無勧無施土木之功、可知、早唱都鄙之知識、宜蒙道俗之助成、因茲載肝要之条、自於別紙述心願之本意於此状、於戯遺音絶兮幾廻隔聞者、勝鬘大会之秋風、真影留兮三躰係係弾者、等覚無垢之勝月、欲興行之無会断（料）、欲安置之無道場、況復法華不断之転読者、遙憶信勝尼之素意、弥陀相続之称念者遠慕曩讃仏之衲言、転経者寄附之料田已空、念仏者勤行之浄場未構、厥外食堂浴室経蔵鐘楼要枢寔繁修営難及、就中僧舎不全、衆園有名弊廬雨滴、佶夏々中之居止尚不安、斜窓風隠長斎々、前之供養又欲闕、若不羨観音垂跡之跡者、豈可忍我忍等無像之像乎、抑朝野遠近之辨因果、緇素貴賤之値仏法、偏是依太子之方便、誰不報化主之恩徳、不報恩者既為人身之底栗車、欲酬徳者須治聖跡之阿蘭若、事之極也、理之至也、然則小施非小、聞聚蚊之成雷、軽資勿軽、見積羽之沈舟、但能取頼（棘）信之弥固、不可論檀施之多少者也、寺院複旧製者、国家弥安寧、僧侶凝新（ママ）誠者、君（臣）子益歓娯、世行憲章守貴草之十七条（人）。保遐寿、伴大椿之八千歳、惣令若男若女若出家之輩、悉結一塊一塵一浄土之像、仍勧進如件

弘安元年九月　　日　　住侶等敬白

弘安元年十二月十日書写之

是定円法印制作云々　　厳経

（田中稔）

昭和三十三年度調査研究概況

I　綜合研究

叡尊の研究は昭和卅年度西大寺に於ける基礎的調査と同寺什宝叡尊像の胎内文書の整理から口火を切り、その時の資料は〝西大寺叡尊伝記集成〟として世に問うた。これは勿論叡尊関係文書記録のすべてではなく、今後の調査の足がかりと云うべきものであつた。

1　西大寺叡尊の研究

これらの基礎調査から叡尊の思想的立場、例えば釈迦信仰、舎利信仰、文殊信仰等のあり方が判明したほか、その活躍の舞台も明らかになり、山城、大和、河内、和泉、摂津、紀伊及び関東に及ぶ数十ケ所の留錫地が把握されるにいたつた。これらの地には偉大な先人の足跡が残されていることは明らかなので、昭和卅一年以降引続きその調査が実施された。その主な箇処は奈良県下で法華寺、海竜王寺、般若寺、大蔵寺等、大阪府下では道明寺、西琳寺、教興寺、京都府下で橋寺放生院、浄住寺等があげられる。

これらの調査によつて集められた多くの研究資料はその都度整理されて、すでにきわめて大部のものとなつているが、その一部は「仏師善円・善慶・善春」（小林、仏教芸術）「道明寺聖徳太子像」（小林・杉山、研究所学報、八冊）「西大寺の舎利塔」（守田、大和文華二●号）等に報告された。しかしそれらはあくまで綜合的研究の一部にすぎないもので、多くの諸寺から集められた諸資料に基いての研究はすべて今後に委ねらるべきである。従つて三十四年度以降さらに鎌倉仏教の系譜をもたどりながら、叡尊の文化史的位置を究明し、その遺された作品についての価値の闡明に努力を傾けることにしている。（彫刻・絵画・工芸室）

2　元興寺極楽坊発見物の調査研究

（文部省科学研究費交付金による研究）

昭和卅三年度下半期、同寺の庶民信仰資料の整理と研究をその主目標として科学研究費の交付を受け、田沢所長を研究主班とし、奈良国立文化財研究所の歴史室を含めた美術工芸班が主体となり、これに奈良国立博物館、その他諸大学の仏教学、社会学、国史学、国文学等の諸先生を糾合し、その調査研究に当つた。

下半期の短い期間だつたので、主として研究の前提となる分類、整理及び保管の方法に限定され、これが庶民信仰の資料として速やかに活用しうるよう記録を作る方向に努力が注がれた。

分類の方法は形式別に実施され、絵画関係として板絵、印仏、彩色印仏、その他。彫刻関係は千体地蔵、板千体地蔵、その他納入文書及び仏像断片。工芸関係として柄香炉、花瓶、献供板、折敷、その他。文書関係として墨書板、こけら経、経巻類、文字瓦類等。仏教民俗資料関係として小型五輪塔、同板五輪塔、笠塔婆、角塔婆、納骨塔等がその大要である。これらはそれぞれにアルファベットの大分類番号を附し、そのもとで同形式のものに通し番号を連ねる方法で整理を行うことに決定した。上のうち、こけら経（石田茂作博士担当）と仏教民俗資料（五来重教授担当）を除いては、すべて研究所の各研究室で担当した。

整理格納に当つては、板絵の如き大型のものには大型の箱を作つたほか、すべて一尺×一、二五尺の箱に納置し、又千体地蔵の如きはプラスティック板に糸で一体ずつ固定させて散逸を防ぐことに努力した。以上の作業は卅三年度分のごく大要である。

尚これらと併行して同寺什宝の聖徳太子、弘法大師両像及び同胎内納入物の調査と研究も進められ、先の庶民信仰資料の一部と共にすでに報告に附せられたものもある。（彫刻・絵画・工芸・古文書室）

3　鳥羽殿遺跡の実測調査

昭和三十三年七月、名神高速度道路の計画が発表され、その路線は明治初年建設の国鉄東海道線に沿つて奈良電鉄竹田駅北方二百米附近を過ぎ、新京阪国道の加茂大橋のすぐ南側の地点に至り、そこから真西に加茂川原を越えて山崎方面に向い、その間城南宮の背面に当つてインターチェンジが設けられることなどが明かにされた。この一帯は十二世紀前半頃白河、鳥羽両上皇が造営された鳥羽殿の宮殿、御堂及園池の遺跡であり、該道路が完成すれば、その重要な部分が破壊されることは必定である。文化財保護委員会、京都府教育委員会は相談の結果、道路

公団の同意を得、この予定路線一帯の詳細な実測調査を行うこととなり、奈良国立文化財研究所建造物研究室が主体となつて、その調査に当つた。

鳥羽殿が存在したと推定されるのは京都市伏見区竹田町、中島町、下鳥羽一帯の土地であり、調査の区域は北東限は奈良電鉄加茂川鉄橋、南限は同電鉄高瀬川鉄橋、西南限は京川橋附近の加茂川原に至るまでの東西約一、五粁、南北約二粁、面積にして二、五平方粁にわたる広大な面積であつた。調査に当つては香川大学助教授浅野二郎、京大農学部大学院村岡正氏外八名で、三班を編成し、トランシット、レベル、測距アリダート使用平板測量を併用し、八月二日から九月二十六日迄の晴天四十五日間、測点一万点以上に及び、縮尺五百分の一、五〇糎毎の等高線の実測図に海抜標高を記入した。

この調査で旧北大路跡らしい地形を見出したこと、南殿の位置は中島町堀端及北之口附近、北殿は竹田、田中殿から小屋之内の国道沿いの樹叢附近、東殿は安楽寿院を含む竹田内畑町一帯、又御所之内にある海抜一九米〇四の丘状地形は築山跡であろう事などが判明するにいたつた。その詳細は、名神高速道路々線地域内埋蔵文化財調査報告（昭和三十四年六月京都府教育委員会刊）を参照されたい。（建築・遺跡庭園室）

4 川原寺の発掘調査

5 仁和寺所蔵古文書聖経等の調査

（この両者についてはやや詳細な報告を本文中に記した）

Ⅱ 美術工芸研究室

1 藤原時代彫刻の研究

前年度に引続いて本年度も各地にわたつて調査を行い、奈良県にある、金勝寺の薬師如来、霊山寺の薬師三尊像（治暦二年銘）や、融念寺の聖観音立像（延久六年銘）、京都府では、岩船寺の阿弥陀如来坐像（天慶九年銘）、大阪府では、興善寺の大日如来（保安元年銘）、薬師如来、釈迦如来坐像（寛治七年銘）を、とくに本年度には納入文書その他で造立年代が確められる像を主体として調査を行つた。（彫刻室）

2 能楽発達期における能狂言面の研究

これも前年度に引続き、三重県の宇留富志禰神社及び賀多神社などの能面及び狂言面を調査した。（彫刻室）

3 平安時代仏画の調査と研究

主として十二天画像の経典的根拠、図像の成立時期の問題等を究め、醍醐寺大師様図像、西大寺本、東寺大治本等の各十二天についての具体的考察を試みることにつとめた。西大寺本についてはこれをほぼ纒めて上梓の時を俟つことにし、東寺大治本については昭和三十三年度美術史学会にその大要を発表した。その要は西大寺本の成立を平安前期も貞観年中の入唐者宗叡の功に帰せらるべきこと、東寺大治本については仁和寺円堂の旧画像の転写と見て天台系図像の一と考えることに結論は達した。尚この他にもこれらに関連して東寺大治本五大尊などに触れる機会があつた。その成果は今後に期したいと考える。（絵画室）

4 南都仏教に表現された講会関係絵画の研究

（文部省科学研究費交付金による研究）

すでに旧年度より着手しつつあつた南都系仏画の具体的な調査とその研究を実施した。今年度の主たる対象としては東大寺の仏画の調査、興福寺の南円堂壁画及び弥勒菩薩厨子扉絵、さらに薬師寺の諸仏画の調査などを行つた。これらの調査はかなり総花的であつたが、その目途とする所は南都系仏画の一般的傾向を明らかにすることであり、ひいては南都系絵画の源流である天平仏画の様相を尋ねることであつた。従つて他面文献の側からの研究も怠らなかつた。しかし法隆寺その他の諸大寺の調査を完了していない今日、まだ結論をなす段階に至つていない。（絵画室）

この他、伊勢市の美術工芸品調査、又法金剛院・安楽寿院の絵画調査を実施、後者は目録を作制した。又当麻寺本堂の解体修理に伴う発見物の調査にも数回立会つた。（絵画室）

5 舎利塔の様式的研究

前々より引続き舎利塔の様式的研究を行つている。東大寺の重源様式（仮称）、唐招提寺の鑑真様式（仮称）、西大寺の叡尊様式（仮称）など様式的に特色を有する舎利塔をはじめとして、全国の各社寺に残存する舎利塔の様式と年代的連関、それらの舎利塔がもつ美術工芸的価値を研究する。西大寺、唐招提寺の舎利塔は一応の調査を終つたので、本年度は唐招提寺と西大寺の末寺関係と高野山竜光院及び霊宝舘にある舎利塔を調査した。（工芸室）

6 厨子の研究

厨子の研究も前々より引続き行つている。諸社寺に残存する厨子の調査研究の主眼は、厨子がもつ年代差による様式上の変化と工芸技術の変遷、その特異性などの解明と、その発生にいたる美術史的研究にある。

本年度は、当麻寺曼荼羅堂内安置の六角形大厨子の解体修理の機会を得て数多くの新資料に直面した。この厨子の製作年代の問題、厨子に施されてある蒔絵の年代的考察及びその技術の時代性、また、蒔絵や鍍金具に見られる文様の様式などは難解な問題であり、全くの新資料で、今後もこれらの資料について更に調査研究を進めたい。(工芸室)

7 能衣裳と小袖の研究

このテーマは「日本の染織研究」の一環である。ここ数年近世初期におけるわが国の染織史に大きい位置を占める能衣裳と小袖の調査研究に当つているが、能衣裳、小袖を美術史的、染織史的に究明するとともに、芸能史、服装史の観点からも研究するため、調査の対象を広め、能衣裳、小袖はもちろん、法隆寺裂、正倉院裂、名物裂などをはじめとして、蒔絵類に描かれてある服装形態にいたるまでを広く調査研究している。

本年度は前々より調査した能衣裳、小袖の整理にあたるかたわら、白鶴美術館蔵の古裂帖と東大寺蔵の東大寺裂を調査した。絵巻物類においては、興福院蔵の都鄙絵巻に描かれた江戸時代元禄期の小袖の様相を考察した。(工芸室)

III 建造物研究室

1 解体修理に伴う調査研究(当麻寺曼荼羅堂)

従来建立年次について問題が多かつた当麻寺本堂(曼荼羅堂)が解体修理される機会をとらえて、奈良県教育委員会に協力して調査を行つた。結果、今回発見した外陣棟木銘により、平安時代末永暦二年(一一六一)に、永暦以前の建物の材料を使い、組替え、規模を拡張して再建されたものであることがわかり、その後、文永五、康永二、長享二、大永八、天正一一・一二、正保五、元禄元、享保八と幾度か小修理が加えられていることがわかつた。なお、永暦以前の建物は、先ず初めは、桁行七間、梁間四間、切妻造、斗栱はなく柱天に桁をのせ、合掌組の丈高い、奈良時代を降ることのない時のものであつて、次いで、それが平安時代初めに、同規模の建物の古材を加え、桁行七間、梁間四間、寄棟造、斗栱は大斗肘木、二軒、二重虹梁蟇股式の堂としてその前面に梁間一六・五尺にわたる前廂を取付けたものになつたことがわかつた。(建築室)

2 六勝寺遺跡の調査研究

京都市左京区岡崎最勝寺町の元公会堂跡に京都国際文化観光会館が新しく建築されることになり、昭和三十三年一一月に着手された。このあたりは平安時代末に、法勝・尊勝・最勝・円勝・成勝・延勝寺のいわゆる六勝寺が造営された所であるので、工事が進むにつれて掘り出される遺跡と遺物について調査研究を行い、尊勝寺の一部であると推定出来る建築址と溝址、また遺瓦多数を発見し、平安時代末の建築を明かにする成果を得た。(建築室)

3 南都諸大寺伽藍配置並に境内地形実測調査

大和上代宮殿寺院跡の発掘調査の目的の一つは平城京の都市計画即ち条坊制並びに大路小路の幅員、南都諸大寺との関係を究明するという問題が含まれている。これら発掘調査を今後一層容易ならしめる目的と、最近の産業開発及び観光施設による破壊を未然に防止し、適切なる環境整備、自然流水利用の防災等の諸計画を実施するに役立てようという多角的な目的から、諸大寺と、研究所との合意のもとにこれらの調査が着手されることになつた。昭和三十三年度来、東大寺より調査費の一部補助を受け、旧境内地の重要部分を実測した。実測した区域の南限は南大門を東西に結ぶ線、西限は西大門跡、中御門、転害門を結ぶ線(京極大路)北は現在の正倉院北限から知足院山北麓、東はまんなおし地蔵尊から手向山八幡東背面土塁跡に至る一帯である。

猶旧東大寺に関係のある天地院や伴寺などをも引きつづき実測調査をつづける予定である。(遺跡庭園室)

4 旧秀隣寺と北畠国司館跡庭園実測調査

中世庭園文化史(大乗院庭園の研究)では、興福寺大乗院庭園を中心として、比較のため室町時代に於ける蓮如上人関係庭園と朝倉館跡庭園などを紹介した。其後興福寺関係文書から文明四年伊勢国司北畠政具の弟某、文明十五年には政具の息孝縁が、更に晴具の息具親が東門院に入室するなど、密接な関係のあることが判明したので、これらが興福寺文化圏内にあるかどうかをただすために、七月上旬に伊

勢国多気にある北畠国司館跡を調査した。一方享祿元年に京都の兵乱を避けて、近江国高島郡の朽木植綱を頼つて寄遇した足利将車義晴が、細川高国を伴つて此地に滞留している事実も明白となつたので、旧秀隣寺の庭園をも殆んど同時に実測調査した。旧秀隣寺の庭園は、将車義晴が、滞留の徒然のままに、庭園を自作したという伝承が西北紀行と近江輿地志略巻九十四高島郡三に書かれている。それは兎も角両者の地形や、汀線の取扱方などはよく似ており、又北畠国師館跡庭園に於ける築山裾にある枯山水の石組や、旧秀隣寺鼓滝の石組の意匠などは、室町時代中期の作例として疑問の余地がなく高く評価されてよいものである。(遺跡庭園室)

5 近世初期建築及び庭園に於ける小堀遠州及びその流派による業績と、その作風に関する研究

(文部省科学研究費交付金による研究)

本研究は、京都御所離宮の研究の一部、近世初期御所離宮作者の問題を取扱つたものである。

近世初期建築及庭園界の巨匠として知られる小堀遠州の業績のうち、私達最近の研究の結果、桂離宮については、その伝承の通りを受けとることが出来ないことを証明した。そこで今回は小堀遠州の本当の作品と、伝遠州作の中で、遠州の弟小堀正春、息権左衛門の作品、遠州の近親中沼左京及松花堂の作品、遠州の弟子村瀬左介、賢庭、剣左衛門、玉淵坊等の業績を分類することを試みた。又遠州の作品の中でも遠州が設計し、しばしば現場を訪ねて、指揮監督をしたものと、設計だけして、現場を弟子の職人達に委せ切つたものとがあるのではないかとの見当をつけて、左記のような文献・現場・両面の調査を行つた。

即ち、1、桂離宮建築庭園、2、仙洞御所庭園、3、京都御所建築庭園(以上昭和二十三年以降三十二年迄調査一応完了)

4、大徳寺塔頭孤篷庵、石橋、敷石道、忘筌露地等、5、近江孤篷庵庭園、6、南禅寺本坊南庭、7、南禅寺塔頭金地院庭園並東照宮附近一帯、8、高野山天徳院庭園(伝遠州作)の実測調査及び、9、宮内庁書陵部、10、内閣文庫、11、史料編纂所蔵遠州関係資料の調査などを実施した。

これらのあらゆる場合について、その内容を厳密に検討して見ると、遠州が設計だけでなく施工をも指導したものは格調が高く、職人委せにしたものは、やはり品位に乏しいことに気がついた。又皇室や幕府からの公式依頼の場合は、故実にしばられ、周辺の干渉を気にしながら政策的な立場で参劃し、どことなくいぢけている。誰へも気がねせず自由な立場で振舞えた邸宅や隠居所の場合は、遠州独特の意匠がはつきり出ていて面白い。この点については将来もつとはつきりした結論を得ることができるであろう。(遺跡庭園室)

Ⅳ 歴史研究室

1 古文書調査概要

前年度より引続いて興福寺所蔵文書典籍の調査を行つた。特に紙背文書の中に二三目ぼしいものが発見されたが、その中「御遂講雑類風記」紙背文書には注目すべきものがある。即ち建武三年十月四日足利尊氏御教書案は半済の起源を思わしめる内容を有している。又その他の文書も何れも建武年間頃のものと考えられるが、この中には当時の社会情勢を知る上での好史料が少からず含まれている。

興福寺以外では仁和寺を始め個人所蔵の文書等の調査を行つたが、仁和寺調査についての詳細は別に譲る。個人所蔵の文書についてはここでの詳論を憚るが、この中には新発見の平安時代の文書を始めとしてかなりの成果を上げることが出来た。(古文書室)

2 古瓦の編年的研究

前年度に引続き飛鳥地方の発掘調査における出土品の整理及び復原を行つた。とくに川原寺の発掘と共に瓦の研究を併行して行い、川原寺創建時の瓦、平安時代、鎌倉時代の遺品の量的関係を究明することに努めた。これらは来るべき川原寺発掘報告書に報告するつもりである。また興福寺食堂の出土瓦も報告書作製のために従来の調査資料を整理し完成した。さらに瓦その他遺物一般の記録及び整理の方法を研究し、遺物台帳をハンドソート・パンチカード法に統一することに決定した。(考古室)

3 弥生式時代墓制の研究

前年度に引続き下関市安岡町梶栗浜遺跡の調査を行い、箱式棺二基、合蓋土器一基の発掘を行つて、前年発見した墓域の施設の詳細を究明した。(考古室)

V 研究発表

A 講演

1 昭和三十三年五月二十四日（於本所）

飛鳥寺塔址の発掘調査　坪井清足

川原寺の第一次発掘調査　鈴木嘉吉

中世庭園文化と大乗院並びに一乗院　森　蘊

2、昭和三十三年十二月二十日（於現地）

川原寺の第三次発掘調査報告会

3、昭和三十四年三月十四日

（於毎日新聞社京都支局）

奈良県川原寺の発掘調査　坪井清足

興福院の「ふくさ」について　守田公夫

京都国際文化会館建設予定地（尊勝寺址）の調査　杉山信三

B 展観

1 昭和三十三年五月二十三、二十四日（於本所）

飛鳥寺塔址及川原寺発掘出土品

2 昭和三十三年十二月二十日（於現地）

第三次川原寺発掘調査出土遺物

VI 昭和三十三年度文部省科学研究費交付金による研究

研究課題	交付金の種別	研究代表者	交付金額
南部仏教に見られる講絵関係の絵画の研究	各個研究	浜田　隆	三〇、〇〇〇円
近世初期建築及庭園に於ける小堀遠州及びその流派の業績と作風に関する研究	同	森　蘊	八〇、〇〇〇円
古文献資料の調査研究並びに写真による資料の蒐集	機関研究	田澤　坦	一、〇五〇、〇〇〇円
元興寺極楽坊発見の資料の研究及整理	総合研究	田澤　坦	五〇〇、〇〇〇円

研究成果刊行物

年度	名称	著者名
昭和二十九年度	奈良国立文化財研究所学報第一冊（佛師運慶の研究）	小林　剛
	同　第二冊（修学院離宮の復原的研究）	森　蘊
昭和三十年度	奈良国立文化財研究所史料第一冊（南無阿弥陀仏作善集の複製）	
	奈良国立文化財研究所学報第三冊（文化史論叢）	小林剛、森蘊、杉山信三、田中一郎、田中稔
	奈良国立文化財研究所史料第二冊（西大寺叡尊伝記集成）	
昭和三十一年度	奈良国立文化財研究所学報第四冊（奈良時代僧坊の研究―元興寺極楽坊の復原を中心として）	浅野清 鈴木嘉吉
昭和三十二年度	奈良国立文化財研究所学報第五冊（飛鳥寺発掘調査報告）	浅野清、杉山信三、坪井清足、鈴木嘉吉
昭和三十三年度	奈良国立文化財研究所学報第六冊（中世庭園文化史）	森　蘊
	奈良国立文化財研究所学報第七冊（興福寺食堂発掘調査報告）	坪井清足、鈴木嘉吉
昭和三十四年度（予定）	奈良国立文化財研究所学報第八冊（文化史論叢2）	小林剛、守田公夫、浜田隆、杉山二郎
	奈良国立文化財研究所学報第九冊（川原寺発掘調査報告）	杉山信三、坪井清足、鈴木嘉吉、田中稔、工藤圭章、田中琢